

戦前の保険会社の年賀状（2）年賀状に選ばれた画像について

毎回連載を読んでいただく読者の皆様に、新年のご挨拶をこめて今年も戦前の保険会社の年賀状を紹介する。松の内には間に合わないかもしれませんがお許しください。今年の十二支は酉ですが、掲載したのは昭和 8 年の富国徴兵生命保険相互会社（現富国生命）の年賀状です。オレンジ色の日の丸を背景にして、ニワトリの見事なシルエットが描かれている。

ところで十二支にちなんだ図柄が数多く選ばれていたかということ、そうでもないようだ。私の手元にある年賀状の数が少ないせいかもしれないが、むしろ縁起の良いものにちなんだデザインが多いようだ。昨年この連載でご紹介した大正生命保険株式会社は、工業デザイナーの先駆けといわれた杉浦非水によって描かれたものだ。また福寿生命保険株式会社の宝船、日本医師共済生命保険相互会社の夫婦岩は、縁起の良い図柄でまさしくお正月らしい年賀状。（福寿生命と日本医師共済は、昨年の新年の連載記事を参照されたい。）

次に掲げた年賀状は、昨年も紹介した日本簡易火災保険株式会社の年賀状である。昨年は昭和 9 年の年賀状であったが、ことしは酉年の昭和 8 年正月のものを選んで掲載した。戦時を彷彿とさせるような独特な建築様式である。日本簡易火災は、富士火災の前身会社であり、この本社は、大阪市南区長堀橋北詰に建っていた。

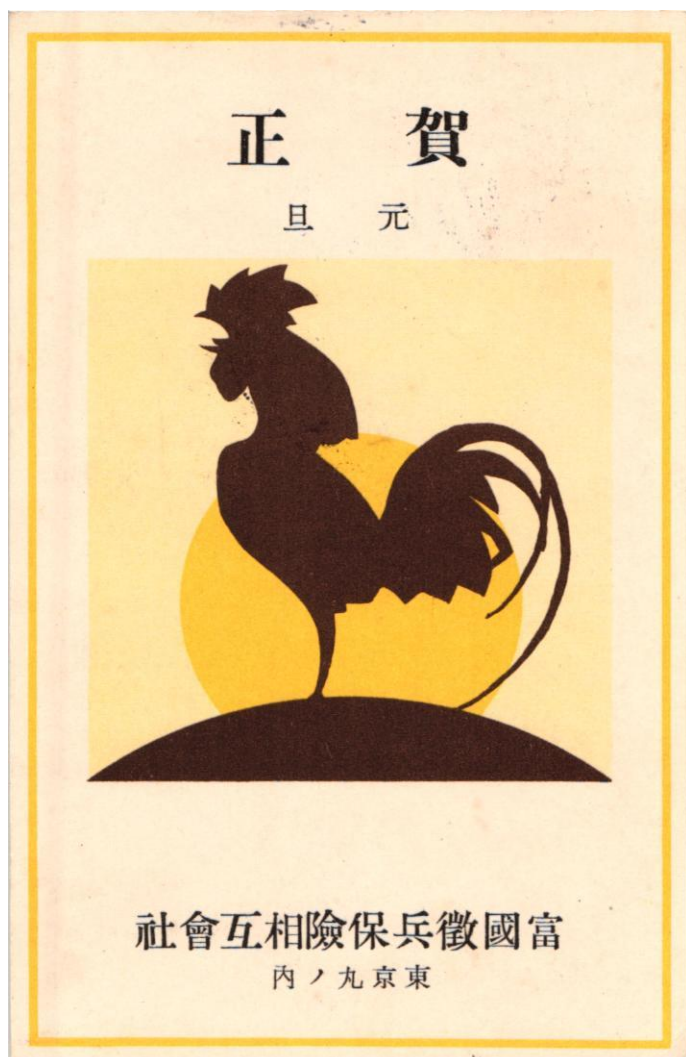
今回執筆にあたって所蔵の絵葉書を眺めていてあらためて気が付いたのは、日本簡易火災のように年賀状に本社の建物を描くものが多いことだ。次に掲載したのは、蓬萊生命保険相互会社の昭和 7 年の年賀状である。図柄だけでは年賀状であることがわからないが、宛名面をみると年賀状であることがわかる。蓬萊生命を知る人は少ないと思われる。この会社は、明治 43 年 8 月に設立された相互会社であり、この時期には第一徴兵（東邦生命の前身会社）のオーナーであった太田清蔵が支配するようになっていた。じつは、蓬萊生命が利用した建物は、銀座にあった第一徴兵の本社であった。翌年の昭和 8 年 8 月に弱小の相互会社 5 社が合同して昭和生命保険相互会社が設立されるが、蓬萊生命はそのうちの一家であったのである。この年賀状は、虎の威を借るという表現がふさわしいかもしれない。画像の面だけでは年賀状かどうかわからないので、宛名面の画像も掲載しておく。

この他に共保生命株式会社（真宗信徒生命）を昭和 9 年に野村が引き受けた野村生命は、年賀状で野村の本社を使っている。掲載したのは昭和 11 年の年賀状であるが、その後「軍艦ビル」と称されたような戦時色豊かな独特の様式の建物である（宛名面については省略）。保険は、目で見たり、手で触れたりできない商品なので、顧客にイメージで訴求することが多い。保険会社が立派な不動産を所有しているということは、保険会社の資産運用が立派であるということを感じさせ、契約者を安心させる効果がある。そのため年賀状では、詳細な保険商品の効用を説明する画像よりも、立派な建築物を使うことが行われたのであろう。

最後に、この傾向がわが国の保険会社だけでなく、海外の保険会社でも使われていたと

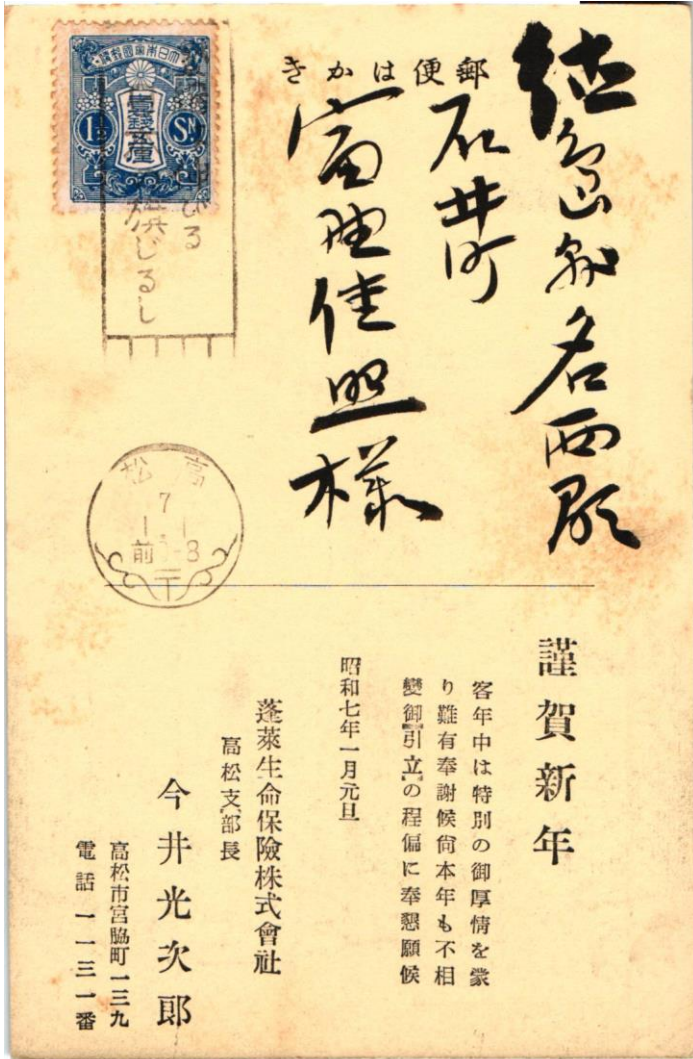
いう事例を紹介しておきたい。掲載したのは、紐育生命（ニューヨーク・ライフ）の年賀状である。見ていただければわかるとおり、日本の契約者に対する代理店からの明治45年のスタンプのある年賀状である。19世紀末から20世紀のはじめにかけて、アメリカおよびカナダの生命保険会社は広く海外進出をおこなっていた。日本の市場も標的とされた市場であり、セミトンチンという特徴が組み込まれた彼らの生命保険商品は、日本でも富裕層にアピールした。日本の保険会社がせいぜい2,000円とか3,000円の保険金額であった時に、5,000円から10,000円という高額な生命保険を販売していたのである。紐育生命も本社ビルの図柄をつかって確実かつ安全な資産性をアピールしたかったものと思われる。立派な建物を使った年賀状としては、海外保険会社が国内保険会社に先んじていたのかもしれない。

今年も連載を続けます。ご愛顧のほどよろしくお願い申し上げます。











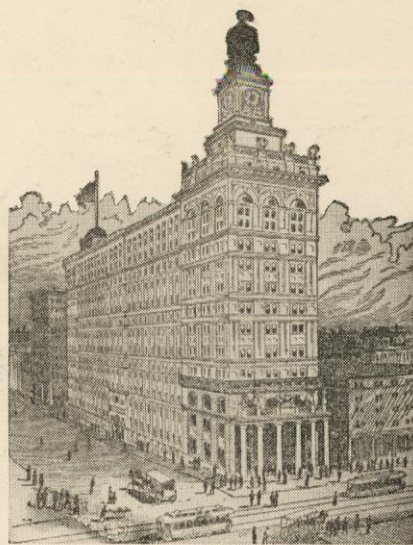
謹賀新年

舊年中は御愛顧を
蒙り忝く奉深謝候
尙本年も不相變御
引立の程偏に奉願
上候 敬白

一月一日

名古屋市東區東外堀町二丁目
紐育生命保險會社代理店

代理店長 黒川耕作



紐育生命保險會社本社
建築價壹千圓